

みんなが行ってしまおうとき 他十二篇

ホルヘ・テイジエル

三角 明子訳

みんなが行ってしまおうとき

みんなが他の星ぼしへ行ってしまうとき

わたしは見捨てられた町に残るだろう

最後の一杯のビールを飲みながら、

その後いつも戻る村へと帰るだろう

酔っぱらいが酒場へと

こどもが壊れたシーソーに

ふたたびまたがるように。

村ですべきことはなにもないだろう

ポケットに蛍をつめるか

酸化したレールの岸辺を歩くか

とある店のすり減ったカウンターに座り

小学校の同級生と話をする以外に。

エドアルド・モリーナ・ベントウラ<sup>1</sup>に

蜘蛛が

同じ糸をいきつもどりつするまじりに

雑草のはびこる

通りをのんびりうろつこう。

落ちてくる

鳩舎を見ながら

やがてわが家に着く。

そこでわたしは閉じこもり

一九三〇年代の歌手のレコードを聴くだろう

宇宙を行くロケットがたどる

無限の行路を

見ようなどと決してせずに。

Quando todos se vayan

## よそものが森で口笛を吹く

よそものが森で口笛を吹く。

パティオはみな霧に閉ざされる。

父親はおとぎ話を読み

死んだ弟は扉の向こうで聴いている。

窓辺で消える

道をしめしていた細長い蝋燭が。

わたしたちはいつ家路についたらいいのかわからなかった

だがよそものが森で口笛を吹き

どこへ向かったらいいのかわからずに立ち止まる。

瞼の裏には冬がたちのぼる

この世のものではない雪を持ちこみながら

雪はわたしたちの足跡と太陽の足跡を消す

そしてよそものが森で口笛を吹く。

もう待つのはやめてくれと言わないといけない、  
だがことは変わってしまい

理解できるひとはいない、わたしたち  
よそものが森で口笛を吹くのを聞く者たちのことばを。

Un desconocido silba en el bosque

### 死者たちと話すには

死者たちと話すには  
ことばを選ばなければならぬ  
かれらがたやすく理解できるように  
かれらの手がかつて  
暗闇のなかでも毛並みに触ればどの犬かわかったように。  
明瞭でおだやかなことばを  
カップのなかに飼い馴らされた滝の水のように  
または客たちが去ったあとで  
母親が並べた椅子のように。  
湿地が鬼火を包みこむように  
夜が迎え入れることばを。

死者たちと話すには  
待つことを心得なければならぬ  
かれらはこわがりだ  
子どものはじめの一步のように。  
けれども忍耐強くすれば  
いつかこたえてくれるだろう  
割れた鏡に閉じこめられたポプラの葉をつかって  
とつぜん暖炉で勢いを増す火をつかって  
身じろぎもせず戸口で目をこらす  
娘のまなざしの前にあらわれる  
鳥たちのくらい帰還をつかって。

Para hablar con los muertos

別れ

わたしはこの手にわかれをつげる  
かつては光の筋を示すことができた  
ときには古代の雪におおわれた  
石たちの静寂を指すことも。

森に、砂に還るようにと  
白い紙に、青いインクにわかれをつげる  
そこからなまけものの川が  
街角に豚が、からっぽの風車がかつては立ちあがったのだが。

友人たちにわかれをつげる  
もっとも信頼してきたひとびとに  
兎と衣蛾  
ぼろを着た夏雲  
低い声で話しかけてきたわたしの影に。

……かれの事件はミューズの頭飾りに  
なにもつけたさなひ……  
エズラ・パウンド<sup>2</sup>

この惑星の徳と恩寵にわかれをつける  
敗残者たち、オルゴール  
日没になると木造の家々の森から  
はらりと落ちるコウモリに。

無言の友人たちにわかれをつける  
どこでならすこしでもワインが飲めるのか  
知ることだけに気をもんでいる友人たちに  
かれらは毎日  
ただの口実にして  
流行遅れの歌を口ずさむ。

ひとりの娘にわかれをつける  
愛しているか否かをわたしに尋ねずに  
わたしと歩き、わたしと寝た  
歩道で燃える葉のもうもうたる煙でいっぱい  
あのいつともしれない午後のことだ。

ひとりの娘にわかれをつける

彼女の顔をよく夢にみる

雨のなか出発していく列車の

かなしげなまなざしに照らされている顔を。

記憶にわかれをつける

そしてわたしの目的のない日々

——塩と水——

への郷愁に

そしてわたしはこの詩にわかれをつける

ことば、ことば、——ほんのわずかな空気が

口によって動かされ——ことばは

ひよっとしたら唯一の真実を隠すためだった。

われわれは息をし、いつか息を止めるのだ。

Despedida

## 世界の終わり

世界が終わる日は

きつと清潔で整然としているだろう

最優等生のノートのように。

村一番の酔っぱらいは

雨溝で眠りこけ

急行列車は過ぎていくだろう

駅には停車せずに。

連隊の楽団は

果てしなく練習するだろう

二十年まえから広場で演奏している行進曲を。

ただ、こどもが何人か

電話線にからまった凧を放りだして

泣きながら家に帰るだろう

母親になんとさえいいのかわからずに。

そしてわたしは菩提樹の樹皮に

頭文字を彫りこむだろう

こんなことはなんにもならないと思いつながら。

福音主義者たちは街角にでて

おなじみの聖歌を歌い

村の老狂女はパラソルをさして歩きまわるだろう

そしてわたしは言うだろう、「世界は終われない、

ハトとスズメはまだ

パティオで燕麦を奪いあっているのだもの」

Fin del mundo

### この世の外のどこかで

川辺の家を出る

郵便配達は一九三五年の新聞を届けてきた

わたしは道糸漁の漁師たちにあいさつする

村の屋外レストランに着く

客はみんな

いつでも日曜日の装いでいる

みんな知りあいたがだれひとりあいさつしない

教会は石と泥で閉じられている  
天文学者が戻ってきて壁に書いた  
「星のない夢は忘れられた夢だ」と  
はるか遠くで兵士たちがかがり火を灯す  
その火で午後が陰る  
やつらはじきに戦いはじめるだろう  
決してこの村には入ってこないだろう  
村には目をつけられた者はいない  
初聖体拝領の装いをした少女の行列がやってくる  
そしてからっぽの椅子に人形を置いていく  
もっとあとになるとアーモンドの目をした娼婦たちがあらわれ  
野の花を一抱え持つてくる  
女たちはみんないなくなる  
掃除人が人形と花を片づける  
そして手押し車でからっぽの場所に持っていく  
われわれの家が開く  
ひとりずつわれわれは家に入る  
はじめて雨が降る、死んだ弟の墓のうえに  
あしたはあしたと同じ日になるだろう

En cualquier lugar fuera del mundo

黄金時代

いつの日にか

みんなが幸福になるだろう。

わたしは自由になる

影からも名前からも。

恐れを抱いていたひとは

自分の足音によりそう

母親の足音を聞くだろう

窓の古びた反射光に照らされて

恋人の顔は永遠に若いままだろう

そして父親はランタンを貯蔵庫で見つけるだろう

パティオでそれを使って

見失ったナイフを探すのだ。

わたしたちは知らないはずだ

オルゴールが

何時間も鳴り続けているのかそれとも一分のことなのか

きみは見つけるはずだ——驚きもせず——

かつて不思議な国を思い描いた地図を、

きみの手のなかには

ふるさとの川からやってきた一匹の魚がいるだろう、

そしてへ彼女はまぶたをあげ

雨に洗われた石のように

ふたたび純粹で莊重になるだろう。

わたしたちみんなが集うだろう

一度として存在したことのないひとびとの

莊重で倦怠に満ちたまなざしのもとに

そしてほんのかすかな笑みをうかべてわたしたちはあいさつをかわす

まだ生きていると信じこんでいるから。

Edad de oro

雨後に生まれた空のしたで

雨後に生まれた空のしたで

かすかに水をかく權の音に耳を傾けながら

考える、しあわせは

かすかに水をかく權の音にほかならないと。

それとも小舟のあかりに過ぎないのかもしれない

埋葬後の夕食のように緩慢な

年月のくらしいねりのなかで

ついでには消えるあの光に。

それとも、もうひたすら歩きつづける以外にないとあきらめかけていたときに

丘のむこうにみつけた家のあかりだろうか。

沈黙の空間かもしれない

わたしの声とだれかの声のあいだの。

その声はただ「ポプラ」、「かわら屋根」と名を言うだけで

もののまことの名をわたしに啓示していく。

明け方、羊の首にかかった

カウベルのチリチリという音と

宴のあとに閉まろうとする扉のたてる音の距離。

湿地で叫ぶ手負いの鳥と

風で吹ききよめられた丘の頂きのうえの

蝶のたたんだ羽根のあいだの空間。

それが幸福だった、

まるで長持ちしないことを知りつつも

意味のない形を霜のうえに描くこと、

湿った土にわたしたちの名を一瞬書きつけるため

杉の枝を切ること、

季節のうつろいをまるごと止めるため

アザミの羽根、タンポポの冠毛をとらえることが。

幸福はそんなものだった

切り倒されたキンゴウカンの夢のように、

また砕けた鏡のまえでの狂ったオールドミスの踊りのようにはない。

けれども幸福な日々が

空からはがれおちた星の旅のよつにみじかくともかまわない

わたしたちはいつでも思い出をかきあつめることができるはずだから。

パティオで罰を受けていることもが

輝かしい軍隊をいくつも結成できるほど丸い小石を見つけたとおなじだ。

わたしたちはいつでもきのうでもあしたでもないある日にとどまることができる  
雨後に生まれた空を見あげながら

そして遠くに

かすかな水音を立てて權が水をかく音を聞きながら。

Bajo el cielo nacido tras la lluvia

## 火のまえにすわって

老いてゆく火のまえにすわり

わたしはその顔をこぼもなくみつめる。

まだワインの残っている粘土製のピッチャーをみつめる、

焔にゆらめくわたしたちの影をみつめる。

これはふたりでともに見いだしたと同じ季節だ

火のまえのその顔にも

焔にゆらめくわたしたちの影にもかかわらず。

なにかことばを見つけてきたなら。

これはふたりでともに見いだしたとおなじ季節だ  
水滴はいまもしたたり、雨のあと桜桃の木は輝く。

けれども焔にゆらめくわたしたちの影は  
わたしたち自身よりも生きている。

そうだ、これはふたりでともに見いだしたとおなじ季節だ。

——わたしはその手をさくらんぼでいっばいにし、その手は  
わたしのコップにワインをついでくれた——。

彼女は老いていく火をみつめる。

Sentados frente al fuego

南部の橋

わたしは昨日ある冬の晴れた日をおもいだした。おもいだしたのはあの、空から青を盗んだ川にかかる橋だった。

わたしの愛はその橋のうえではまるで無意味だった。

水に沈みかけたオレンジ、だれを呼んでいるかもわからない声、松林のなかで輝きをほどこれた一羽のカモメ。

昨日わたしは冬がほかの季節のあかるさを夢みるときには橋のうえではだれしもが何者でもないことをおもいだした。

そしてひとは冬の夢のなかの動かない一葉になりたがる、

愛は水に沈み消えゆくオレンジにも及ばず

松林のなかで輝きをほどこれたカモメにも及ばない。

Puente en el sur

## 父の肖像、共産主義の闘士

日曜の午後

惑う太陽が手さぐりで

失われた春のキンゴウカンを探すころ

父は愛車ダッジ三〇で

国境のじゃり道を

小石にも、うち捨てられたうずらにも見える村を訪ねゆく。

ぬかるみを越えて着くこともあった

友なるマプチエ族<sup>3</sup>の居留地<sup>2</sup>に

その領土は日ごとに縮められていく

父は、大地が

パンや魚のように増え

真にみんなのものにはずの時代について話す。

三十年前から

「農業改革万歳」と叫び

インターナショナルを歌った

調子外れの声

プエルチエの寒風に吹きならされた平原で  
組合や非法法の集会で

農民や坑夫

小学校教師や学生に囲まれ

わずか一握りの種から

新しい世界の樹木が育つようにと。

カステイリヤのケープのように高潔な  
父をわたしは思い出す、党と革命を守り  
なにひとつ見返りを期待しなかった

エディ・ポロ<sup>4</sup>——こども時代の英雄——が  
パール・ホワイト<sup>5</sup>のために戦ったように。

父の夢は美しかった

道端に

永遠に花咲くプラムの樹のように  
だからわたしは、ずっと待っていた

時代で生きるためおいでと願う。

道の名は変わった、

ルイス・エミリオ・レカバレン<sup>6</sup>、エリーアス・ラフェルテ<sup>7</sup>などに

(父はかれと一九三一年の雨の朝、テムーコで知りあった  
当時、入党するのは英雄だけだった)。

家鴨と雌鳥の

世話をずっと続けられたい、

孫たちのためにと遺した

林檎の樹が育つのを見てほしい。

何年でもずっと

七月十四日に「ラ・マルセイエーズ」を歌えばいい、  
ポルドーからやってきた両親を讃えて。

おだやかな日々になりますように、

凧いだ日のラグーンのように。

いつでも友人たちと集まり

みんなの冗談に誰よりも笑うといい。

野原の無限の静寂に包まれて

テホ投げを遊び、バーベキューを食べるといいと。

冬の午後

病みあがりの太陽が

街の煙の向こうからのぞくころ

わたしは国境のじゃり道を行く父を見る

革命と地上の天国について

小石にも、打ち捨てられたウズラにも見える村むらで話すため。

*Retrato de mi padre, militante comunista*

### 生命反応もなく

なんのため生命反応を出すのか？

わたしにはボーイに託して

ナプキンに書いたメッセージをきみに送るのがせいぜいだ。

たとえきみがここにいなくても。

何年ものあいだきみが距離の影にいようと

きみを突然に愛する

午後三時、

この時間狂人たちは  
カカシになり船乗りの格好をし  
麦畑で雲を脅かすことを夢みる。

きみを思いだすことが  
絶望の、それともエレガンスの所作であるのかわからない  
とうとうこの世界では  
自殺が唯一の秘蹟になった。

ポイントレバーを切り換えるべきだったのかもしれない  
列車を脱線させるために。

村唯一のホテルで

セックスするのは

水車の軋みを聞くため

警部補の午睡を中断させるため

戸籍簿役人の午睡も。

もしわたしが泥酔か夜間外出禁止令違反で投獄されたら  
手鏡で日光信号を送ってくれ

この手鏡のまえできみは粉をはたく

わたしの中高時代の同級生たちがしたように。

楽しんではいけない

鸚鵡に下品なことばを教えることを。

「パパ」や「母親クラブ」の言い方だけなら教えてもいい。

覚えておいてくれ、わたしたちはみな小声で話す時代に生きていると

そしてガラ・ディナーの日にスープをすすることが

大声で夢みることを意味すると。

厳格さの時代はなんと美しいことか。

妻たちは幸せに歌う

失業中の夫の

一張羅の背広につきをあてながら。

もう二度と街に血が流れることはないだろう。

齧歯類はわたしたちのチーズを齧っている

ある未来の名のもとに

そこではすべてのキャセロールが

スープであふれかえるだろう、

そしてトラックはあけぼのの重みにふらつくだろう。

行儀よくふるまうことを覚えなさい

ここは密告が徳とされる国だ。

気球で旅することを覚えなさい

そしてきみのバラストを洗いざらい投げ捨てるんだ、

ジョン・バエズ、ボブ・ディラン、キラパジュンのレコードを。

キンチェロスと『第七連隊』<sup>10</sup>を暗記しなさい。

チヨコレート・ボーイ、グルジェフ、<sup>11</sup>アリカグループのおしえを忘れ、<sup>12</sup>

トロツキヤフロイトの自伝を、

著者がサインしナンバーを入れた『二十の愛の歌』<sup>13</sup>を焼き捨てなさい。

わたしは民芸品も

浜辺のテントで寝ることも好きではない、そう覚えておきなさい。

そして毎週月曜に新聞についできたスポーツ特集より

きみを愛したことなど金輪際ないと。

森のなかで夕暮れに想いをめぐらすのをやめなさい。

わたしの州ではロマが足を踏みいれることすら禁じられたよ。

さあ

わたしはオレンジ入りチチャをもう一ジョッキ頼もう

そしてきみは

修道院にこもったほうがいいだろう。

わたしは救世軍の『ときのこえ』を読んでいるところだ

天然痘はふたたび不治の病となり

われわれのごどもたちは経済学者か独裁者になる夢を見られるという話だ。

Sin señal de vida

著者最後の帰郷についての覚書

ハワイのステファン・バチウに<sup>14</sup>

そしてまだ見ぬいところ、

トランシルバニアのクルーシにいるバシレイグナに。

1

村では

数人がわたしを

新聞に名前が出ている詩人として知っている。

わたしはコメルシオ通りを散歩する

そこはいまではベルナルド・オイギンズ大通りと呼ばれている<sup>15</sup>

(サンティアゴの道と同じく)。

わたしは大地と共振した。

シードル酒場に行く。

そこにはいつもの客がいて

昔なじみの級友たちがあいさつしてくる

かれらの夢は村長や市議員になったり、シトロネタを買つことだ。<sup>16</sup>

映画館は閉館したが

セピア映画のポスターはまだ残っている。

フェンス沿いの

イラクサたちは破壊不能のことばで話しつつづけている。

我が家の屋根にはスズメの会議が集結している。

わたしははじめて

どこにも属する場所はないのだ

どの場所もわたしに属してはいないのだと考える。

2

風は濡れた乳飲み仔牛の匂いを運んでくる。

3

キロメートル六六二、午後四時。

コメルシオ通りではトルコ人とスペイン人がカウンターの向こうであくびをする。

午睡の時間、街角には人っ子一人おらず

アイスクリーム売りの原始的な角だけがぼつぼつと穴をあける。

町はずれでは農夫たちが田舎バスを待っている。

他の村に行こうかとも思う

街路をてのひらに村の運命を読もう。

まきばには雌牛とヒマワリが点々としている。

スモッグで病んだ街へ戻ったら慰めになるものも散っている。

旅をしよう、ロシア革命を描いた小説のようにぎゅう詰めになった二等車で。

目隠しされた風車の窓が見えた。

破産したあるじとはどこかの酒場で一杯飲んだことがある。

わたしは父の家のパティオを横切りすらせずに午後を過ごす。

村に残っていた唯一のブリキ屋は

ロンキマイに仕事探しに行った。

たいした稼ぎにはならなかったがすくなくとも山脈を眺めることはできた。

ライカもコダックも持っていないので

絵を描くことにした。

九人のこどもたちにほんものを見せてやろうと。

マプチエ族の男たちは一軒だけのソーダファウンテンのウーリッツァーが奏でる

メキシコ歌謡が気に入り

プリンシパル通りの縁に座って聴く。

アルゼンチンへ葡萄の収穫に行き、青い背広とトランジスターを持ち帰る。  
テレビが町にやってきていた。

子どもたちはもう道端では遊ばない

リビングに腰を下ろし音も立てずバットマンや西部劇を見る

わたしの友人たちも何時間でもブラウン管の前にいる

UFOが来たらしいのに。

ことばの魔力を信じるのは困難だ。

わたしは推理小説

スポーツ誌、恐怖譚を読む

身分証にあるとおりただの公務員だ。

借金と、水のコップにアルカ・セルツァー<sup>17</sup>が落ちる音にさえ痛む二日酔いの目覚めしか

持っていない。

街にある家では光熱費も水道代も払っていない。

酒場に難を逃れてばかりだ

「掛け売りお断り」という看板をじっと見ながら。

わたしの未来は支払うべき勘定だ。

未来を清潔にひろげることができたならいい、  
母がわたしのベッドシーツをひろげるように。  
パティオに干してある服を見る。

向かいの家に鶏泥棒が入った。

わたしは広場に、聖パウロの話よりさらに古くさいニュースの載った新聞を読みに行く。

かつては孤独だったためしのない場所でひとりぼっち  
打ち捨てられたダート競輪場まで歩く

一九三〇年のチリ自転車選手権の幽霊すら現れない。

サッカー場だったところで草を食む馬がいる。

みんな州都にプロの試合を見に行くことにしか興味がない  
いっぽうわたしはヒースの一片を齧ろうかと思っている。

### 徹夜常習者

わたしは一九四五年と同じく

シャイマ山の噴火で赤く染まった月を見る。

屋根裏部屋から見ていたのとおなじだ

あのと きも『レ・ミゼラブル』とアシェット年鑑を読んでいた。

11

きみを覚えている、そのことを思い出してくれ。  
思い出せないとしてもたいしたことではないが。

いつでもレールのうえを歩くきみを

農場で一番熟れたモモを探しているきみを見るだろう。

12

プエルト・モン行き急行はもう過ぎた

その旧名は「南の矢」。

駅から橋へと歩く

橋のあかりに「一九一八年、ディキンソン鑄造」と書いてある。

もうその鑄造所はない

鑄造所そのものがない

カウティン川とグアコラ聖堂に記憶を打ち明ける。

橋の欄干に張りついて

わたしは夏空を見る、星ぼしの銀の釘がまるで固定できていない。

わたしたちはポンティアック四〇でこの村落に着いた  
将来も舗装されることのない道を通って。

豚や雌鳥を驚かす。

子どもたちは目をみはり身を乗り出す。

密売所では

若い安ワインを頼み主人と話す。

ヒトラーは生きていると断言するトラクター運転手とも

魚のジャーキーをおごってくれたふたりの新参者――

タルカウアノの沖仲仕とかれを馬の後ろに乗せてきたマプチエ族の相棒とも。

みんな同じように飲んだ

そして先祖たちと同じく

酔っぱらって村へ戻った、この村にもいつかわれわれは拒否されるだろう。

日曜ミサを出て。

娘たちはサンティアゴから届いたばかりの流行の服で歩く

連隊の楽団はそれにあわせてクンビア<sup>18</sup>を奏でる。

家のあるじたちは初物のスイカを買う

最新の犯罪の新鮮なニュースを載せた新聞も。

町はずれの通りはみな、消防士、ロータリークラブ会員、警官、年金生活者、悪徳弁護士、

小学校教員でいっぱいだそこを歩く

そこでは太陽の短剣が木造の貧しいフェンスの肋骨を通して入る。

わたしは最後の荷馬車と蒸気機関のラッセルを感じる

ヒマワリで飾られたまきばに寝そべり平和を探す。

輝かしい麦畑の波を眺め

わたしたちのため泣こうとしている雲の果てしない旅を眺める。

*Notas sobre el último viaje del autor a su pueblo natal*

(訳者・明治学院大学教養教育センター准教授)

- 1 エドゥアルド・モリーナ・ベントウラ Eduardo Molina Ventura (1913-1986) チリの詩人、テイジエルと長く親交を結んだ。
- 2 エズラ・パウンド「ビュー・セルウィン・モーバリ詩篇(生涯と交友)」より。新倉俊一訳『エズラ・パウンド詩集』(一九七六年角川書店刊)より引用した。
- 3 マプチエ族 チリおよびアルゼンチン南部に住む先住民族。
- 4 エディー・ポロ Eddie Polo (1875-1961) 無声映画時代のアクションスター。
- 5 パール・ホワイト Pearl White (1889-1938) エディー・ポロと同時代の活劇女優。
- 6 ルイス・エミリオ・レカバレン Luis Emilio Recabarren (1876-1924) チリの政治家、チリ共産党創設者のひとり。
- 7 エリアス・ラフェレ Elias Laferte 政治家、社会活動家。レカバレンの前の時代にチリ北部で社会主義運動を指導した。
- 8 キラバジュン Quilapayún チリのフォルクローレグループで、社会不正義を告発する歌を歌った。このため、一九七三年の軍事クーデタ後レコードは発禁処分となり、メンバーは亡命を余儀なくされた。
- 9 キンチェロス Quincheros 同じくチリのフォルクローレグループグループ。伝統的歌謡を歌い、政治的にはピノチエト軍事政権寄りの態度を取った。
- 10 『第七連隊』7. de Línea 正式名称は『セプティモ第七連隊』Adios al Séptimo de Línea、十九世紀末、ボリビア・ペルー同盟とチリのあいだで行われた戦争を舞台に、ホルヘ・イノストロサ Jorge Inostroza (1920—1975) が一九五五年に発表した歴史小説。
- 11 グルジェフ Gurdjieff (1872?—1949) ロシアの神秘主義思想家。
- 12 アリカグループ Grupo Arica ボリビア人オスカル・イチャソ Oscar Ichazo がチリのアリカで創設したカルト集団。
- 13 『二十の愛の詩』Veinte poemas de amor チリの詩人パブロ・ネルーダ (Pablo Neruda, 1904-1973) の出世作『二十の愛の詩とひとつの絶望の歌』Veinte poemas de amor y una canción desesperada である。アジエンデ社会主義政権への協力でも知られるネルーダだが、この初期詩集には社会派的意識の兆しはない。
- 14 ステファン・バチウ Stefan Baciu (1928-1993) ルーマニアの詩人、評論家。Antología de poesía surrealista latinoamericana(『ラテンアメリカ・シュルレアリスム詩撰集』)の編者としても知られる。
- 15 ベルナルド・オイギンズ Bernardo O' Higgins (1778-1842) チリを独立に導いた活動家、政治家。チリの首都サンティアゴ・デ・チレの中央部には、かれの名を冠した大通りが走っている。
- 16 シトロネタ チリで組み立てられたシトロエン2CV。
- 17 アルカ・セルツァー アメリカ合衆国産の制酸・鎮痛薬。
- 18 クンビア チリで好まれるゆったりとした舞曲。

「ホルヘ・テイジェラ Jorge Teillier (1935-1996)」

一九三五年チリ南部の町ラウタロ Lautaro に生まれ、一九九六年に死去した。パブロ・ネルーダ後のチリ現代詩を代表する詩人のひとりで、詩作のほかには文芸評論も多く発表した。故郷である国境地方は、先住民族マプチェ族に代表される白人以外の文化が色濃く存在する地域である。「父の肖像、共産主義の闘士」にも歌われた父の影響で社会意識には早くから目覚めるが、かれの作品にはあからさまに歌われることはなかった。サンティアゴ大学に学び、卒業後は大学出版局に長く勤めた。本稿の底本としては *Los dominios perdidos*. Tierra Firme, Santiago de Chile, 1992 の第二版 (1994) を用いたが、「死者たちと話すには」「南の橋」「著者最後の帰郷についての覚書」はキャロリン・ライト Carolyne Wright による西英対訳アンソロジー *In Order to Talk with the Dead*. University of Texas Press, Austin, 1993 から引いた。訳出にあたっては前掲のライト訳を適宜参照した。